

## 論 文

## 反訓にみる「相反相因」について

朱 捷

同志社女子大学・現代社会学部・社会システム学科・教授

## Fanxun: “Opposite meanings, intimately entwined”

ZHU Jie

Department of Social System Studies, Faculty of Contemporary Social Studies,  
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Professor

## Abstract

The Chinese character *luan* (亂) bears two contradictory meanings: “chaos” and “order.” Scholar and commentator Guo Pu (郭璞, 276-324) was the first to note the phenomenon of a single character possessing two diametrically opposed meanings. Over the centuries, theories about the phenomenon have proliferated, a debate which has given rise to the scholarly term *fanxun* (反訓, enantiosemy).

Those who resist the concept of fanxun claim that these contradictory meanings are more recently accreted additions that result from the process of *jiajie* (假借, phonetic borrowing) rather than meanings that inhere in the character from the start. Supporters of the idea of *fanxun* -- especially contemporary supporters -- attempt to parse the contradictory meanings as a dialectical conflict.

In contrast to these viewpoints, the present paper advances two claims. The first is that, when taking into account the conventions of character creation and the history of character development, the phenomenon of a single character bearing two diametrically opposed meanings is the result of the phenomena of *zhuanzhu* (轉注, derivative cognates) and *jiajie* (假借, phonetic borrowing). That is, this paper asserts, even if one accepts the claim that the second, contradictory meaning was a later accretion through the process of *jiajie*, the conventions of character creation make the appearance of *fanxun* inevitable. Meanwhile, *zhuanzhu* and *jiajie* are conventions of character creation that work to increase the number of characters and the meanings that they bear, and both are based in the same sources of sound and meaning.

From this foundation, the paper offers an additional formulation: “opposite meanings, intimately entwined (相反相因, *xiangfan xiangyin*).” That is, the paper asserts that a character that bears diametrically opposed meanings is not to be understood as a dialectic, but as “opposite meanings, intimately entwined” (i.e., contradictions which exist in intimate relation to each other) -- an understanding of the phenomenon that is characteristically Chinese.

## はじめに

「歛」は欲すると与える、「乞」<sup>きつ</sup>と「囚」<sup>かい</sup>は求めると与える、「貸」は借りると与える、「稟」<sup>りん</sup>は受けとると与える、とそれぞれ一字が相反する両義を兼ねる。これらについて、清の王念孫（1744～1832）が「義有相反而実相因者、皆此類也<sup>1)</sup>」（意義が相反しながら、実に相因<sup>あいしたし</sup>んでいるものは、みなこの類だ）、と書いている。

漢字に相反する意義をもつ字があることをいちはやく指摘したのは、晋の郭璞（276～324）である。

肆既為故，又為今。今亦為故，故亦為今，此義相反而兼通者<sup>2)</sup>。

肆は故となし、かつまた今となす。今も故となし、故も今となす。これは意義が相反しつつ兼ねて通じることである。

以徂為存，猶以亂為治，以曩為臯，故為今，此皆訓義有反覆旁通，美惡不嫌同名<sup>3)</sup>。  
 徂を存となすのは、亂をもって治となし、曩<sup>そ</sup>をもって臯<sup>らん</sup>となし、故をもって今となすがごとし。これはみな訓詁において義に反覆旁通があり、美惡が同名を嫌わざることである。

苦而為快者，猶以臭為香，亂為治，徂為存。此訓義之反覆用之是也<sup>4)</sup>。

苦にして快となすもの。なお臭をもって香となし、亂をもって治となし、徂をもって存となすがごとし。これは訓義の反覆して用いることである。

『爾雅』と『方言』に記されたこれらの注をめぐって、その後千数百年にわたって、賛否両論が延々と繰りひろげられ、「反訓」という言葉も生まれた。

本稿は王念孫の「相反相因」を用いて、議論が錯綜した反訓という問題にひとつの考察を試みようとするものである。

## 一、反訓を漢字造字法からとらえなおす

## 1. 反訓は成り立つのか

郭璞は一字に相反する意義をもつ現象を指摘しながら、「反訓」という言葉は使っていない。王寧によると、「反訓」の初見は、錢大昕（1728～1804）の『潜研堂答問』にあり、その後、術語化されていった<sup>5)</sup>、という。

白川静は「訓詁に於ける思惟の形式について」において、反訓を詳細に論考し、つぎのように定義している。

反訓はまず、一つの文字が同時に相反矛盾する二訓を有するものである。同時的であるということは、また直接的であるといってもよい。すなわち、文字の本義が本義としてはたらきつつ、直接にはそれとは相反矛盾の関係にある訓義をも有つということである。（中略）反訓においては、正が反を自己否定的に直接に措定してくるのだからなければならない。次第に循環してたまたま対極に至り、そこに一見矛盾的な両訓が成立したとしても、それはいわゆる引申比義の結果であって、内部的に矛盾対立を含むというような構造的なあり方ではない<sup>6)</sup>。

この定義を、「離」など正反両義をもつとされる13の漢字にあてはめて考察した結果、白川は、「一字にして相反する二訓を含むと考えられる文字は存在せず、その悉くが仮借訓たるを知りうるのである<sup>7)</sup>」とし、「結論的にいうと、私は反訓というものの成立を否定せざるをえない<sup>8)</sup>」と述べている。

一見非の打ち所のない定義のようにみえる。ところがこの定義は何にもとづいているのだろうか。およそ定義は事実にもとづいて事実から抽出しなければならないが、白川のこの定義には、歴史的事実の裏付けが示されていない。のちに触れるように、そういう裏付けはおそらくないだろう。ないのに定義が先行している。たとえていえば、Aを定義するのに、Aにない要

素をならべておいて、Aの存在を否定するようなものである。反訓は、白川定義に提示された要素を有していないので、当然、否定されるわけである。

一方、主に運用面の理由で、郭錫良も反訓を否定している。氏の論文のタイトルは「反訓不可信」（「反訓は信じるに値しない」）であった。言語はコミュニケーションの道具であり、対立する概念を同じ一つの「語」で表示すれば、コミュニケーションに支障をきたす。一般的に、共時の語彙体系において、正反が相対立する意味をもつ「語」は、非常に成り立ちがたい<sup>9)</sup>、という。

原理的にそうであるかもしれないが、文字や言語の生きた現場では、必ずしもそうではない。たとえば「亂」を「治」と訓ずるなどの反訓例をとりあげつつ、錢鍾書（1910～1998）がつぎのように述べている。

古人所謂“反訓”，兩義相違而亦相仇。（中略）若用時而祇取一義，則亦無所謂虛涵數意也。（中略）匹似《墨子・經說》上：“為衣，成也，治病，亡也”；非即示“已”雖具兩義，各行其是乎<sup>10)</sup>？

古人のいわゆる「反訓」は、兩義が相異なりながら相親しむのである。（中略）用いるときは一つの意味しか取らないため、複数の意味を含むことはない。（中略）あたかも『墨子・經說』上にあるように、「已」が「衣をつくるときは、成る、病氣治療のときは、亡くなる」を意味する。「已」が兩義をもちながらも、各々我が道を行くことをまさに示しているのではなからうか。

このように、同じ文脈において相反する意味が同時に現れることがないから、コミュニケーションに実際支障をきたすことはないのである。

とはいえ、構造的に「一つの文字が同時に相反矛盾する二訓を有する」例はないわけではない。黄耀堃の論文「説『亂』」（「亂」を説く）はそれを論じている。

それによると、「亂」が「治」、つまり秩序の意味をもつかどうかを解く鍵は、発音にある。

「亂」と関連のある文字には「𤝵」、そしてその異体字の「𤝶」がある。いずれも音韻的に、上古韻部の「元部」に属する。

「𤝵」は両手（受）を使って幼児が争うのを治めさせる、と『説文解字』で説明されている。形からみれば、乱れた糸を整理し、混乱から秩序へ向かわせるとの意味がある。しかし、混乱から秩序へのプロセスにおいては、混乱と秩序の間に明確な境界がない。よって、この「𤝵」を偏にもつ字に、治めるを意味する「𤝶」と混乱を意味する「𤝷」があり、異なる方向性を示している。

一方、元部に属し「𤝵」や「𤝶」を一部にもつ文字に、無秩序、混乱を示す文字「𤝸」や「𤝹」もあれば、従順を示す「𤝺」もある。さらに音韻学的に「来母歌部」に属し、元部に非常に近似し、意味的に「𤝺」に近い文字として、「𤝻」もあげられる。

さらに、混乱を意味する「亂」の正字ともされる「𤝼」という字がある。「亂」と同じく、来母元部に属する。字形からみても音韻からみても、無秩序の意味をもつ。しかし、西周青銅器「貉子卣」にみる金文𤝼について、『古籀文』は「𤝼」字の異文に間違いなし、「理修」の意味だ、と解釈している。『説文解字』では「𤝼」が「煩」としているの、この用例はそれと相反する意味を示している。

以上の考察にしたがえば、「亂」という来母元部の発音をもつ字は、もともと相反する意味を含んでおり、ちがう文脈において異なる意味があらわれる。本義にしても仮借にしても、正反兩義を兼ね備えられるもの、と同論文は、結論している<sup>11)</sup>。

「亂」についての研究が諸説紛々のなかで、音韻と字形の両方から考察したこの研究は、音韻学の裏付けを提示してくれた意味において貴重である。そして一字に構造的に相反する意味をもつこともありうることを示唆している。

## 2. 「二義が同条を嫌わず」

反訓に懐疑的な議論には、反訓は「字」と「語」のちがいを混同した錯覚によるものだという批判がよく見られる。

語彙学や訓詁学では、「語」は言語の単位、「字」は「語」を記録する記号であり<sup>12)</sup>、または「語」は独自に運用できる言語の最小単位、内容は「語」の「義」であり、「外部形式」は口語では音、書き言葉では字形である<sup>13)</sup>、とされている。

「字」と「語」は不可分的に絡み合いながらもイコールの関係ではない。たとえば、「女」という字は、「女子」をあらわすこともできれば、二人称の代名詞をあらわすこともできる。前者は nǚ、後者は rǔ と発音する。後者の意味は前者と何ら関係がないうえ、発音もちがうため、別の「語」ととらえられる。ただし、両者は「女」という字を共有しているので、同一形態の「同形語」と見なされる<sup>14)</sup>。

これを図示すれば、図1になる。

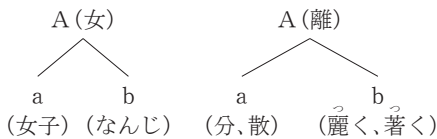


図1

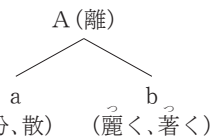


図2

A(女)という「字」に、a(女子)とb(なんじ)という二つの「語」が同居している。意味がまったく関係のない別々の「語」なので、本来はそれぞれ異なる「字」で表すべきところだが、同じ屋根の下に寄せ合っている。

前節で触れた白川静のとりあげた13字のうち、筆頭に「離」があった。分かれる、散るの訓をもつ一方、偶を意味する「麗」の訓も有する。これに対し、白川静は「離の反訓義は離字の固有する訓詁ではなくして、他字の仮借音による偶合に過ぎないものである<sup>15)</sup>」とあって、反訓として認めない。

すなわち、「離」という「字」は二つの「語」を背負っているが、一つはたまたま紛れ込んだ他人の子だ、というとらえ方である。

同じ例として、「繇」<sup>よう</sup>をあげることもできる。郝懿行(1757~1825)『爾雅義疏』にいう。

『廣韻』引『詩』「我歌且繇」,「繇」蓋訓「憂」, (中略), 下文又云「繇, 喜也」, 二義相反。凡借聲之字不必借義, 皆此例也。「繇」蓋「慆」之假借, 『方言』云:「慆, 憂也」<sup>16)</sup>。

『廣韻』は詩経の「我歌且繇」を引いており、「繇」はよく「憂」と訓じられる(中略)。下の文にまた「繇は喜なり」ともいい、二義は相反する。およそ音を借りる字が義まで借りる必要がないのは、みなこの例のとおり。「繇」はけだし「慆」の仮借である。『方言』は、「慆は憂なり」と言う。

「繇」には、「喜」と「憂」の相反する二義があるが、「憂」は同じ発音の「慆」の訓であり、「慆」は「繇」の「聲」を借りているものの、「義」までは借りていない、という。いいかえれば、「繇」も二つの「語」を背負っており、一つは「繇」の発音を借りて宿っている他人の子である。固有する訓詁ではないととらえれば、この「繇」にみえる「二義相反」も反訓として認められないのである。

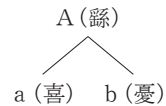


図3

羅奇偉が『反訓』性質研究という論文で、反訓を「字」を共有するものと「語」を共有するものとの二つの形に分けて、同じく「亂」を例に、つぎのように図示している。

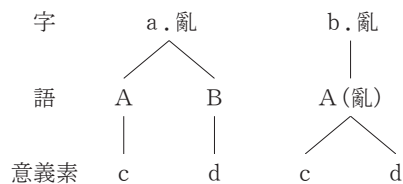


図4

aでは、「亂」という「字」はそれぞれc（亂）とd（治）の意義素（sememe）をもつAとBという「語」を直接記録している。bでは、「亂」はcとdという二つの意義素をもつA（亂）という「語」を直接記録している。前者は「字」を共有する反訓、後者は「語」を共有する反訓、と説明される<sup>17)</sup>。原文では「正反義共字」、「正反義共詞」となっているが、本稿では「共字反訓」、「共語反訓」と訳しておく。

これにしたがえば、白川静の定義する反訓は、「字」が正反両義をはじめから有する「語」を直接記録するbタイプだと理解できる。一方のaは、異なる二つの「語」が同居するタイプで、その中には仮借によるものもある。

反訓の研究で、多くの研究者から、「字」と「語」の混同の例としてよくあげられるのは、郭璞の「苦」についての解釈である。

『方言』の「遲、苦、了、快也。」に対して、「はじめに」で引いたように、郭璞は「苦而為快者、猶以臭為香、治為亂、徂為存。此訓義之反覆用之是也」と注している。

相反する「苦痛」と「快樂」が「苦」に同居しているという解釈。これに対して、蔣紹愚は『方言箋疏』の説を引いて、つぎのように図示しつつ、「字」と「語」を混同したと指摘している。

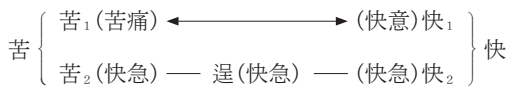


図5 ←→ は意味が相対する、  
—— は意味が同じことをあらわす。

\*「快急」は原文のまま、「快<sup>はや</sup>く、急ぐ」を意味する

要するに、『方言』は苦<sub>2</sub>が快<sub>2</sub>と訓ずることができると言っているのに、郭璞はそれを誤解して、苦<sub>1</sub>を快<sub>1</sub>と解釈してしまったのである<sup>18)</sup>。

これを、羅奇偉の図4のbにあてはめると、つぎの図6のようになる。

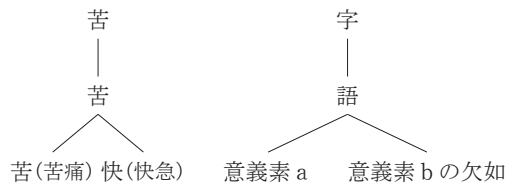


図6

図7

\*意義素bが意義素aと相反することを意味する

苦という「字」は苦という「語」を記録しており、苦という語には、苦痛の意味の「苦」と、<sup>はや</sup>快く、急ぐの意味の「快」との二つの意義素が含まれている。しかし、苦痛の「苦」と急ぐの「快」は相反する意味をなさない。だから反訓にならないという。

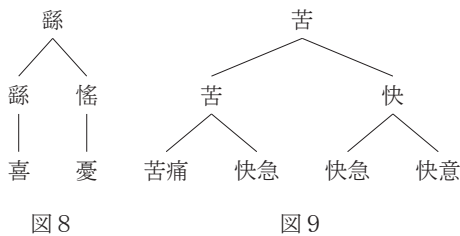
ところで、「語」という言葉を用いていないものの、反訓を否定する白川静の理由は基本的に、図示すると、図7のようになる。相反する一对の意義素のうち、一方が構造的に欠如しているのである。

図6と図7のちがいは、前者は二つの意義素の間に相反する関係が成り立たないのに対して、後者は相反する意義素がはじめから欠如している。前者も実質的に欠如しているものと見なしうるので、どちらの場合でも反訓が成り立たないとされる。

しかし、図4のaが示しているように、いわゆる「共字反訓」も存立すると考えられる。「字」は、二つの「語」を記録しており、それぞれもっている意義素が互いに相反している。この場合、反訓は二つの「語」のもつ意義素のあいだに発生するので、図4bのような、一つの「語」の中に相反する意義素を二つもつ、いわゆる「共語反訓」とは当然異なる。すなわち、反訓を構成する二つの意義素の由来がちがうのである。いってみれば、「共語反訓」の場合は、相反する意義素を一つの「語」の中にはじめからもっているとするならば、「共字反訓」の場合は、他の「語」から借りるなどしてとり入れたものである。「共字反訓」に仮借が多いのはそのためである。一「語」のうちに相反する意義素を

構造的にもつことを反訓成立の条件とする「共語反訓」の立場に立てば、「共字反訓」は認められないが、仮借によって獲得した意義素も認める立場に立てば、「共字反訓」は反訓の条件を十分満たしていると考えられる。

たとえば図3の「繇」は、仮借によって同居になった「愴」のもつ「憂」という意義素は、「繇」という字のもとで、本来の「喜」という意義素と反訓をなしているとして認められる。図示すれば図8のようになる。



反訓をめぐる議論のうち、「字」と「語」の区別を強調するものが多い。むしろそういう区別をわきまえる必要が大事であるが、「語」に偏重する向きもなきにしもあらずと言わざるをえない。「字」は「語」を記録する記号とはいうものの、漢字の「字」が単なる記号ではないことも、議論の原点にしっかり据えておかなければならないように思われる。

ここで図5を図9のように縦に展開してみる。意義素の取捨選択によって見えてくるものが異なることがいっそう分かりやすくなる。「苦」と「快」の共有する「快急」という意義素をとれば、同じ意味の同訓になる。「苦痛」と「快意」ととれば、反訓になる。図示すれば、図8と同じ形になる(図10)。



「苦痛」と「快意」をとるのは郭璞の誤読だ、という指摘は多くの研究者によって支持されている。一方、研究者の中に、『訓詁学大綱』の著者、胡楚生のように、反訓と認めるのに躊躇しながらも、『方言』のあの『快』ははたして『快速』の義であって、『愉快』の義ではないと断定できるかどうか<sup>19)</sup>を検証した人もいる。その検証はすこぶる興味深い。要約するとつぎの通り。

『方言』は各地の方言を雅言で解説するものである。郭璞が注を記した巻二の「逞、苦、了、快也」のほかにも、巻三にも「逞、曉、校、苦、快也」という一條がある。どちらも最後の「快」は雅言で、それまでの文字を説明している。ところで、この二條にみる逞、曉、校、了はいずれも願いが叶う、もしくは明瞭爽快の意味である。それを受け止めて説明する快という字は、当然ここでは愉快の意味になる。ならば、一緒に並んでいた「苦」もおのずと愉快の意味ととるべきである。ただし、朱駿声(1788~1858)の『説文通訓定声』では「苦快一聲之轉、取聲不取義(苦、快は一声の転であり、声をとりに、義をとらない)と言っており、「苦」は方言の愉快を記録するのに、いわば当て字として用いられているかもしれない。もしローマ字表記を使っていれば、このような誤解が起きなかっただろう<sup>20)</sup>。

この検証は、つぎの2点において非常に示唆的である。

ひとつは「苦」は当て字ながら、たしかに「愉快」を記録していたことがこれによって明らかになったのである。したがって、図5に示されたような、郭璞が「苦痛」義の「苦」を「快意」義の「快」と混同したとする多くの研究者の指摘が成り立たなくなる。「苦」には、仮借によるものの、たしかに愉快の意味があったのである。そうすると、「苦」という一「字」が「苦」と「快」の二「語」を記録しているのとらえなおすべきである。図示すれば、先ほどの図10と同じ形になる。

もうひとつは、ローマ字表記なら誤解が起き

なかつただろうという指摘。著者は、漢字が表音文字なら「苦」に愉快の義が混入することもなかつただろうという理由で、反訓とは認められないとするが、しかし、漢字はローマ字とちがいが、単なる音符記号ではないからこそ、字義も無視できないことがこれによって再確認されたのである。

一方、一步引いて、「苦」が「快急」義を飛び越えて「快意」義をとりいれるのに、飛躍があったと認めるとしよう。しかし、つぎのようにつながりの輪がどんどん広がる例も指摘される。

『爾雅・釋詁』：「苦は、息なり」。『廣雅・釋詁』では、「𩇛は息なり」とする。いっぽう息はまた餽しよくの仮借である。『廣雅・逸文』：「餽は食なり」。人は食事するときは愉快になる。ゆえに、「苦は快なり」。これは借字で借字を解釈するものであり、反訓ではない。これもまた一説である<sup>21)</sup>。

「苦」はこのような長い連鎖のプロセスを経て「快」にたどりつくこともありえる。参考にする「一説」としては十分興味深い。「語」の立場からは荒唐無稽にみえるかもしれない。快(楽)を苦(痛)の訓とした郭璞は、「偷換概念<sup>22)</sup>」(概念のすり替え)や「移花接木<sup>23)</sup>」(巧みにすり替える)と批判される。しかし、「字」の立場からは必ずしもそうではない。

たとえば、清の王引之(1766~1834)の『経義述聞』に、「二義、同条を嫌わず」という説がある。「君」という字は、皇帝など最高権力者を意味する一方、群衆の「群」という意味ももっていた。いにしえには「君」が「群」と同じ発音だったからである。これをとりあげて、王引之は、

古人訓詁之指本於聲音，六書之用廣於假借，故二義不嫌同條也<sup>24)</sup>。

古人の訓詁はもともと音声にもとづくものであり、六書の使い道に仮借が広く用いら

れる。ゆえに二義、同条を嫌わずなり。

と述べている。

「君」と「群」は意味がずいぶんかけ離れていながら、ただ同じ発音の仮借により、「君」字を共有していた。これは個別な例ではなく、「二義、同条を嫌わず」が広く見られる現象であった。音声の仮借により、異なる意味が字を共有するのがむしろ一般的な法則だったともいえる。それゆえに古代の訓詁学は音声にもとづいていたのである。

苦痛の「苦」と快樂の「快」の結びつきは、「二義、同条を嫌わず」の例の一つと考えられる。「苦」と「快」を結んだのは、「君」と「群」のように、音声である。さきほど触れた朱駿声の『説文通訓定声』のほか、章太炎(1869~1936)の『小学答問』もつとにそれを指摘している。

若從雙聲相轉之例，雖謂苦借為快，(中略)可也<sup>25)</sup>。

双声相転ずる例にしたがえば、苦といえども快に仮借するのは可能である。

「語」の次元ではさまざまに指摘されているように、「快」を「苦」の反訓とするのは誤読だろうが、「字」の次元では、音声によって結ばれているから、ありえないことではない。郭璞の説も一概に間違いともいえない。

### 3. 反訓は転注と仮借の一形態

錯綜した反訓議論の中で、もっとも反訓の本質をついたのは、意外にも反訓批判論者からの指摘である。ここで二篇の論稿をとりあげる。

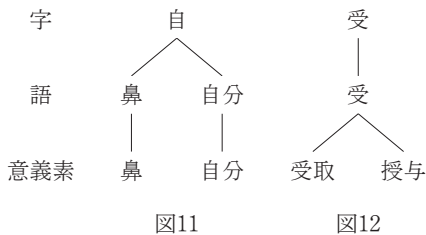
まず万献初の「同源仮借と語義『反訓』<sup>26)</sup>」。反訓論者が反訓を論じるとき、漢字の歴史の視点を欠き、語義の訓釈などに拘泥してしまい、そこから抜け出せない、と指摘する同論文の主旨は、漢字発展史の角度から反訓現象の一端を明らかにしようとするものである。

問題の本質は「語」よりも「字」、そして字の歴史、にあるというのは、まったくその通り

だと思われる。

そこで同論文は、「同源仮借」というキーワードを提示する。「自」は、「鼻」と第一人称の「自分」をそれぞれ示しており、「同音仮借」と呼ばれていた。一方、「受」は「受け取る」と「授与する」を表しており、「受」と「授」は上古では未分化だった。のちに、分化され、「授」という字が作られたが、「受」と「授」は本来同源であった。このような本来、同源で、「二語」に分かれたものを「一字」で兼ねて表すものを「同源仮借」と見なされるべきだ、という。

相反する二語が本来同源だったとの指摘も注目すべきである。しかし、図11と12のように、「自」は「一字」で「二語」を記録しているのに対して、「受」は「一字」で二つの意義素をもつ「一語」を記録しているのである。



したがって、「受」という「字」は、「二語」を記録しているわけではない。「受」が未分化される前は、二つの意義素をもつ、「一語」であった。それがのちに、「受」と「授」という「二字」が別々に記録する、「二語」（「受取」と「授与」）に分化されていくのである。

ただし、分化されたあとの「二語」は、「一字」で表すことはもはやできない。分化後に、「受取」と「授与」は「受」と「授」という「二字」で表すようになったのである。図12の「受」字は、分化される前の「受」という「一語」を表しており、その時点における「受取」と「授与」は、「語」ではなく、「語」に含まれる意義素である。

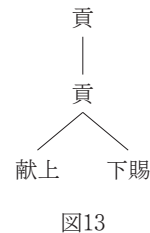
とすれば、同論文の主張する、二語が一字を借りる「同源仮借」は、成り立たなくなる。二語が一字を借りるのは、図11にみられるが、そこには二語の間に、意味上にも関連がなく、

同論文が主張する意味における同源ではない。いわゆる反訓は存在せず、「同源仮借」に過ぎない、とする同論文の結論も苦しくなる。

ただし、同論文は字の歴史と同源に注目している点において、傾聴すべきところがある。のちに述べる転注と仮借は、いずれも同源を元に行っているからである。

つぎに、齊佩瑢の『訓詁学概論<sup>27)</sup>』をとりあげる。同著には、反訓にかなりの紙幅がさかされている。要点は、1) いわゆる「反訓」は語義の変遷現象に過ぎず、訓詁学の法則ではなく、厳密にいうと「反訓」という名詞は成立できない。2) 反訓の奥秘は「相反相因」にある。

たとえば「貢」という字。本義としては、上から下へと下から上への双方向の意味を含んでいた。のちに分化して献上と下賜という二義に分かれていった、という。図示すれば、図13のようになる。



「貢」という「字」は未分化の「語」である「貢」を記録し、その語に相反する二つの意義素が内包されている。

ここで齊佩瑢が王念孫の「義有相反而実相因」を引いて、『相反相因』この四文字が反訓の奥秘を道破した。相因とは、原始の本義であり、相反とは後の分化である。今のみ知って、古に味いから、相反といえは相訓ずることができると早とちりしてはいけな<sup>くら</sup>いと述べている。

訓は言葉の意味を解釈し、説明するという意味であり、ここでの相訓ずるとは、相反する意義素同士で解釈することを指している。「献上」は「下賜」だ、という類いの解釈方法を批判している。相反する「献上」と「下賜」はさかのばれば同じ本義から分化されたものに過ぎない、



という。

「反訓」は反対の意味から解釈する、という誤解をたしかに生みやす。これは多くの研究者によってつとに指摘されてきたことである。しかしそもそも郭璞は反対の意味で訓釋できるとは言っておらず、相反する意味が同じ字に同居して、そのあいだに相通ずる関係があることを指摘しているのとどまっている。「美悪が同名を嫌わざる」は前者を、「義が相反しつつ兼ねて通じる」は後者を意味している。その意味において、王念孫の「相反相因」は、相反するものがどのように「兼ねて通」じているかを喝破したといえる。それは斉佩瑢の解釈のように、相反する意味が本源では同じだということである。「兼通」（兼ねて通じる）は、相反するAとBが、AはB、BはAのように反対に解釈できるという意味ではなく、AとBが源を一つにしている、いいかえれば本源では通じている、ととらえるべきであろう。

反訓とは本来は、「治」でもって「亂」を解釈しようとするものではなく、それらがどのように同じ「字」に同居するようになったのかを明らかにしようとするものである、ととらえなおした方がいいのではないか。そして「相反相因」はどのように同居するようになったのかをもっとも本質的に説明しているように思われる。

「相反相因」が反訓の奥秘を喝破したと指摘した斉佩瑢は、反訓の本質をずばりついていた。しかし一方、「厳密にいうと『反訓』という名詞は成立できない」と言いながら、「訓詁は古の字やことばを解釈するものであり、相反の原則に基づいて古語を訓釋してはじめて反訓と呼べる」と続いた。相反の原則に基づいた訓釋とはどんなものか実例を示さないまま、その存在をあたかも認めているような発言もしており、矛盾を感じさせてもいる。

一方、「相反相因」は、漢字の造字法、または生成の法則のいわゆる「六書」、象形・指事・形声・会意・転注・仮借のうち、とくに転注と仮借の説明にもなる。転注と仮借のちがいは、陸宗達の『説文解字通論』によればこうである。

転注は、同じ語源から新しい「語」が生まれたときに、その「語」のために新しい「字」をつくること。「語」がつつぎと生まれてくるにつれて、そのための「字」も新規につくられ、どんどん増えていく。同じ語源から派生されるものなので、新規の「字」は、その語源の音声と意義に沿ってつくられるのである。

これに対して、仮借は、字を無制限に増やしていくわけにはいかないので、新しい語に対応するために、新しい語と現有の語の意義や音声上のつながりを利用して、現有の「字」に新たな意義を付与することである。

一方は字の新規生産、増やす方向、一方は現有字の兼用、収斂する方向である<sup>29)</sup>。

あるいはいいかえれば、前者は字の派生、後者は義の派生、ともいえよう。どちらも意義、音声上の同源や同根をふまえていることがポイントである。

転注はいくつかのパターンがあるが、そのうちの一つは、同じ語源から相反する語と字が生み出されるものである。たとえば、章太炎の説にしたがえば、先に「天」があつて、発音にもとづいて変ずれば、「地」が生まれる、という。「天」と「地」は「双声」、同じ子音に沿って、セットでつくられたのである。同じパターンではさらに、「古」と「今」、「始」と「冬」（「終」の本字）、「精」と「粗」、「疾」と「徐」、「生」と「死」、「燥」と「湿」、「加」と「減」、「消」と「息」、「文」と「武」、「男」と「女」<sup>29)</sup>・・・などなどおびたしい。

一方、仮借の例として、たとえば「西」があげられる。「西」は本来、鳥が巢の上にいることをあらわしていた。巢の上にいるのは、巢に入り休むことを意味する。そこから、とばりに入って休むことも「西」と呼ぶ。さらに日没の方向も「西」と呼ぶようになる。日没の方向をあらわすために新規の字をつくらず、鳥が巢の上にいる「西」で兼用したので、仮借とされる<sup>30)</sup>。

一方、反対の意味に仮借される場合もある。「紹」は継ぐの意味だったが、断頭刑の切断の意味にも仮借される<sup>31)</sup>。

こうしてみると、漢字の生成には、意味と音声の同源をふまえた、字の「分化型」と「兼用型」があるといえる。これを反訓に当てはめてみれば、反訓も大きく「分化型」と「兼用型」の二つに分類できる。

試みに齊佩瑢『訓詁学概論』にみる反訓の用例を検証してみた。「授受同語」、「古今同語」、「廢置同語」、「美惡同語」、「虚実同語」と五つの類型に整理された反訓は、「分化型」と「兼用型」に再分類できる。

すでに図13でみた「貢」は、「貢」という「語」を記録し、そこから「献上」と「下賜」に分化されていく。「賜」という字が「貢」からの転注で新規につくられたわけではないが、「貢」から二語が分化された点において、転注と同じ図式といえる。

それから「告」。上に報告するのにも下に申し渡すのにも「告」だったが、のちに後者のために「誥」という字が新規でつくられていく。

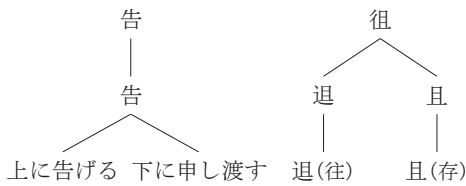


図14

図14の時点では、図13と同じだが、そこからさらに「誥」という字が分化される。この新規字の誕生で転注が完成される。しかし、二語二字が生まれたので、反訓の対象ではなくなる。したがって、反訓の対象とされるのは、図14の時点のものである。図13と14はあわせて「分化型」として分類できる。

これらに対して、「徂」は「兼用型」を示している。「徂」は往く、死ぬと存在の両義をもつとされる。しかし、前者は本来「退」と書く。後者は存在を意味する「且」の同音仮借であった。図示すると、図15のようになる。

これと同じなのは、「毒」。毒する、災いをもたらすと、厚くするの二義をもつが、後者は「篤

」の同音仮借であった。図16の通り。

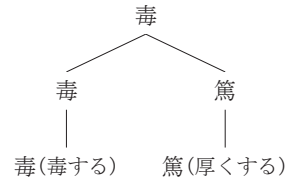


図16

齊佩瑢がとりあげた反訓例のうち、「兼用型」はこの二例のみ。「分化型」は、「貢」・「假」・「貸」・「借」・「乞」・「受」・「市」・「買」・「告」・「初」・「落」・「囊」・「廢」・「仇」・「豫」・「毒」・「偽」・「顛」・「末」・「終」・「空」・「鞠」・「虚」・「亢」・「康」・「室」・「允」・「展」など、圧倒的に多い。

反訓は、あたかも訓詁学の法則の一つのように勘違いされ、相反するものは何でも「亂」は「治」だ、のように解釈できると誤解されていた。それを正すため、齊佩瑢は詳細な検証を通して、「反訓は語義変遷の現象に過ぎず、訓詁学の法則ではない」と力説している。

訓詁学の法則ではないのはその通りであろう。「語義変遷」も重要な指摘である。ただし「変遷」、すなわち反訓にみる相反両義の発生は、漢字生成の法則、転注と仮借に沿っているとらえた方が、反訓本来の姿が見えてくるように思われる。反訓はなにも特別なものではなく、転注と仮借の一形態に過ぎない。転注と仮借は、いずれも同源をふまえている。おそらくその意味において、王念孫が「相反相因」と言ったのだろう。

ところが、反訓の奥秘を「相反相因」と見抜いていながら、齊佩瑢はそれを個々の反訓例の検証に生かせていない。「相因とは、原始の本義であり、相反とは後の分化である。」という自身の解釈にしたがえば、本義から相反する意味が分化された多くの例は、反訓として認めていいはずであるが、「語義変遷の現象」であって「訓詁学の法則ではない」と、「相反の原則に基づいて古語を訓釋してはじめて反訓と

呼べる」ことにこだわって、とりあげたほとんどの反訓例を否定している。

一方、羅奇偉の『『反訓』性質研究』は、齊佩瑢の「相反相因」解説に不確かさがあるといつて、自らの解釈を提示した。それによると、王念祖の「義有相反」はある語や字の相反両義を指し、「実相因者」は「義有相反」の説明で、相反する両義のあいだに引申関係があることを指している<sup>32)</sup>、という。齊佩瑢の説に注意しながら、「奥秘」を見逃しているように見受けられる。

## 二、反訓の奥秘「相反相因」をさぐる

### 1. 「相反相因」の「因」について

上で触れたように、齊佩瑢は「相反相因」を、「相因とは、原始の本義であり、相反とは後の分化である」と解釈している。この「因」はただ「原始の本義」と理解してよいか、もう少し探してみたい。

「因」には「親しむ」の意味がある。『漢語大詞典』は、章太炎『春秋左伝説』巻一の「因、亦親也」と、韓愈「祭薛助教文」の「同官太学、日得相因、奈何永違、祇隔数晨」を引いている。後者の「相因」は「相親しむ」の意味である。本稿でも「相反相因」をとりあえず「相反して相因む」と訳してみた。

一方、白川静は反訓の存在を否定しながら、反訓の存在と「反訓の存在が信ぜられてきた」という事実とは、区別して考えられなければならない。(中略)そしてそこから逆に、反訓ということの本質が考えられるのでなければならぬ<sup>33)</sup>、とも述べている。そしてつぎのように指摘している。

動静・拳止・黑白のごとく、意義上の対待語に至っては、殆んどその数を知らないものである。しかしながらこれらもまた、そのままでは弁証法的思惟を含みうるものではあるまいと思う。それらはいずれも、自己否定的に對者を措定することにより、さらに高次の概念を生むという構造的な発展的

なしかたによって生じたのではなく、むしろはじめから同時的に存在するもの、すなわち一なるものを離析することから生じた対偶に過ぎないのである。

ものを対偶的に考えるということは、必ずしも両者を矛盾的に考えるということではない。すなわち弁証法的に考えるということではない。中国においては、陰陽の二元は究極的に絶対の対極に立つものではなくして、実は一なるものの二つの属性に過ぎない。

中国にあつては、陰陽は単なる自然的理法の表象に過ぎなかつた。両者は交流承通し、流行還帰してやまざる宇宙の理法として表現される。それは反極的であるよりも相対的であり、鬭争的であるよりも調和的聯關的である。絶対否定的であるよりも、むしろ相互肯定的である。いわゆる反訓がつねに反覆旁通という語で示されているのはかかる意味に於いてであり、それは実に一つの環の対偶を意味するものであつたに過ぎないのである<sup>34)</sup>。

引用が長くなつたが、「因」を考える上に非常に示唆にとんだ重要な指摘である。

ところで、その前にひとつ寄り道をしなければならない。

上述の、「自己否定的に對者を措定することにより、さらに高次の概念を生む」というのが中国的思惟ではないという論述にしたがえば、本稿冒頭にみた白川の反訓定義、「文字の本義が本義としてはたらきつつ、直接にそれとは相反矛盾の関係にある訓義をも有つということである。(中略)反訓においては、正が反を自己否定的に直接に措定してくるのでなければならぬ」というのは、本来ないものを求めているのか。

白川静のその論文は、反訓から弁証法的思惟を導き出そうとする議論に対する批判として書

かれたものとして知られる。しかしながら、反訓に下す自らの定義は、弁証法的なおいがないだろうか。

反訓はどうやら特別扱いされ、理念が先行しているように思われる。白川静は仮借などによりできた反訓の例を数多く分析し、なんどもそれらは「次第に循環してたまたま対極に至」ったものだとして述べているが、「正が反を自己否定的に直接に措定してくるのでなければならぬ」という弁証法的なおいのする定義からすると、そうであるかもしれない。しかし、漢字本来の生成法則、六書からすると、転注や仮借の法則に沿っているのである。したがって、「二つの文字が重なり合った上に生じた単なる偶合の結果<sup>35)</sup>」のように見えても、仮借の法則からすれば、たまたまではないのである。

たとえば、「快」が「苦」に同居する例。たまたま紛れ込んだように見えても、音韻上の同源をちゃんとふまえているのである。「苦痛」は「快樂」だ、というような解釈は行き過ぎかもしれない。「語」の次元からみて、「苦」のうちの「苦痛」義と「快」のうちの「快樂」義を結びつけるのは誤読かもしれない。しかし、字の次元からみて、「苦」と「快」がいったん同居すれば、「苦痛」義と「快樂」義の間の通路を遮断するのは、研究者の机上でできて、文字使用や生きた言語の現場では無理であろう。「苦痛」義と「快樂」義が互いに相容れないとして排除しあわずに、一つの「苦」に同居していても違和感がない、という事実の方がもっと重要であるように思われる。

その意味において、反訓の奥秘をせつかく指摘した齊佩瑢もやや理念先行していたといえるかもしれない。「相因とは、原始の本義であり、相反とは後の分化である」と解釈していながら、自らとりあげた多くの「分化型」反訓例を、ことごとく「語義変遷の現象」に過ぎずと否定している。

「貢」から「献上」と「下賜」の二義が生まれたのは、「天」と「地」がセットで生まれた、いわゆる転注と「同源からの分化」において似

ているという事実より、「相反の原則に基づいて古語を訓釋してはじめて反訓と呼べる」という理念が先行していたのである。

反訓に、「相反の原則に基づいて古語を訓釋」することを求めるのは、そもそも郭璞の本意にも沿わない。

繰り返しになるが、反訓とは本来は、「治」でもって「亂」を解釈しようとするものではなく、それらがどのように同じ「字」に同居するようになったのかを明らかにしようとするものである、ととらえた方がよい。そして反訓にみる相反両義の発生は、漢字生成の法則、転注と仮借に沿っている。したがって反訓はなにも特別なものではなく、転注と仮借の一形態に過ぎない。そのうえ、どのように同居するようになったのかをもっと本質的に説明できるのは、「相反相因」なのである。

さて、寄り道はこれくらいにして、「相反相因」の「因」に戻る。

白川静は「相反相因」に触れていないものの、齊佩瑢の解釈よりも、先ほど長々と引いた論述が、つぎの二点において「因」に対するすぐれた解釈となっている。

一つは、「陰陽の二元は究極的に絶対の対極に立つものではなくして、実は一なるものの二つの属性に過ぎない。」

もう一つは、「両者は（中略）反極的であるよりも相対的であり、鬭争的であるよりも調和的聯関的である。絶対否定的であるよりも、むしろ相互肯定的である。」

前者は、相反するものが未分化の本源ではひとつであること、後者は分化されても互いに否定するよりも相互肯定的である、といいかえられる。

転注と仮借によって漢字は字の派生と義の派生をしていく。転注と仮借の全部ではなく、そのうちの一部で、一字がそれぞれ相反する一意義素をもつ二語、または一字が相反する二つの意義素をもつ一語を記録する現象が出現する。どちらにしても、結局は一字に相反する二意義素が同居する。相反する二意義素は同じ語から

分化されたにせよ、音声の仮借によって借り入れられたにせよ、意義や音声の同源にもとづいている点において、同じなのである。そして、相反する二意義素のあいだは、絶対的な対立より、相互肯定的な関係で結ばれている。すなわち、反訓において、本源で一つだということが、相反する意義素どうしの対立より本質的である。

王念孫の「相反相因」説のもとづくところは定かでないが、最初に「相反相因」を提起したのは、方以智（1611～1671）とされる。方以智は「反因」と題する一文で「相反相因」を論じていた。

凡相因者皆極相反。（中略）得此反因，衡對八觚皆明矣<sup>36)</sup>。

およそ相因む者はみな極めて相反である。この「反因」（物事は相対しながら一つであること）がわかれば、宇宙あらゆることがみな明らかになる。

且挙大較言之，陽清陰濁，至相反也。霄壤縣判而玄黃相雜，剛柔敵應而律呂協和，雌雄異形而牝牡交感，可謂不相因乎<sup>37)</sup>？

大きなところから例を挙げると、陽が清く陰が濁り、至極相反している。雲泥がかけ離れていながら天地が相交わり、剛柔が敵対しながら律呂が調和し、雌雄が形を異にしながら牝牡が交感する。相因まないといえるのか。

豈非天地之至相反者，本同處於一原乎哉<sup>38)</sup>？  
なんと天地の至極相反するものは、本来一つに同居しているのではないのか。

因對待謂之反因，無對待謂之大因<sup>39)</sup>。  
相反があるから「反因」といい、相反がなければ「大因」という。

これらを見ると、対立が本源において一つであることが力説されており、対立が解消された究極の世界は、「大因」とされている。

反訓はよく弁証法か否かで議論されがちだが、弁証法を当てはめようとするのは、白川静が批判したように、履き違えであろう。それよりもむしろ、その根底にあるのは、こうした「相反相因」の哲学というか、世界のとらえ方ではなからうか。

## 2. 易にみる「相反相因」

ところで「反因」において、方以智は「相反相因」の例として易を挙げている。

「復」反「剥」，即因「剥」；「姤」反「夬」，即因「夬」<sup>40)</sup>。

「復」は「剥」を逆さまにしたもので、「剥」に因っている。「姤」は「夬」を逆さまにしたもので、「夬」に因っている。

「復」卦は☱、<sup>1</sup>「剥」卦は☶、<sup>2</sup>「姤」卦は☴、<sup>3</sup>「夬」卦は☱、それぞれ互いに陰陽の配列が上下逆さまになっている。そのあいだに「相反相因」の関係があるとされる。方以智はさらに、易の卦を「無非錯綜，無非反對<sup>41)</sup>」（錯綜でないものはない、反対でないものはない）とも指摘している。

知られているように、易の六十四卦は、陰陽の配列からペアーとなる三十二対に分けられる。そのうち二十八対は互いに陰陽の配列が上下逆さまになっている。方以智が例にあげた「復」と「剥」卦などは、ここに含まれている。

屯☵と蒙☶	需☱と訟☶
師☶と比☶	小畜☱と履☱
泰☱と否☷	同人☲と大有☱
謙☱と豫☱	隨☱と蠱☱
臨☱と觀☱	噬嗑☲と賁☶
剥☶と復☱	无妄☱と大畜☱
咸☱と恒☱	遯☶と大壯☱
晋☱と明夷☱	家人☱と睽☱
蹇☱と解☱	損☱と益☱
夬☱と姤☴	萃☱と升☱
困☱と井☱	革☱と鼎☱

震☳と艮☶      漸☱と歸妹☵  
 豐☱と旅☷      巽☴と兌☱  
 渙☵と節☶      既濟☵と未濟☲

そのほかの八卦はひっくり返しても卦体（卦の形）が変わらない。

乾☰と坤☷      頤☶と大過☱  
 習坎☵と離☲      中孚☴と小過☴

この場合は乾と坤のように、陰陽配列の横の反対でペアーを組む。前者の二十八対は「覆卦」、後者の四対は「変卦」と呼ぶ。「変卦」はひっくり返しても同じ卦にしかならないので、変じて横の反対で対の相手を見つかる。「変卦」は「錯」と呼ばれ、「覆卦」は「綜」と呼ばれる。

以前、拙文「易経にみる回文的思考<sup>42)</sup>」において、対になる卦の、とくに爻どうしにおける爻辞の向きあい方について論じたことがあるが、廖名春の論文「二二為耦，相反為義——『周易』卦義新論」は、「雑卦傳」にしたがいつつ、三十二対の卦義どうしがすべて相対する関係にあることを明らかにしている。

たとえば、屯卦☳と蒙卦☶は一方は芽生え、一方は「物の稚」、おろかの意味と解釈されてきたが、廖名春の考察によれば、じつは「生まれたて」と（それを）「覆い隠す」とのように、意味が反対になっているのである。

あるいは同人卦☶と大有卦☲、一方は「親」、一方は「衆」と従来解釈されてきて、相対していないように見えるが、大有卦の「衆」はわけへだてなくどこにもいるから多い、同人卦の「親」は特定の親類関係や親しい関係で人を求めるので少ない、ととれば相反しているのである<sup>43)</sup>。

卦体のみではなく、卦義どうしもことごとく相反する「対」となっていれば、易経が「相反相因」の原理に支えられていることがいっそう明らかになる。

そもそも「易」には、変化の意味がある。変化の「化」は、甲骨文字では、逆さまの二人となっている<sup>44)</sup>。方以智の「譚諸名」によれば、

生死変転のイメージがこめられているのである。

倒人曰<sup>レ</sup>，而立人其旁，一生一死之名也，製字者苦心哉<sup>45)</sup>！  
 逆さまの人は<sup>レ</sup>といひ、そのそばに人を立たせて、生と死をあらわす。字をつくる人の苦心がにじむ！

まさに、相対すれば変「化」が始まる、という造字法である。

反訓は転注や仮借の法則に沿って出現したもののだが、一方ではこうした「相反相因」の土壌に根ざしていたのであろう。

### むすび

「反訓を漢字造字法からとらえなおす」と「反訓の奥秘『相反相因』をさぐる」という二つの視点から、ここまで反訓についての考察を試みてきた。

一字に相反する両義が存在することは、ほとんどの研究者が認めているところである。それを反訓として認めるかどうか、議論が分かれる。字と語の混同や「他字の仮借音による偶合に過ぎない」、「正が反を自己否定的に直接に措定してくる」ものではない、などがよくみられる否定の理由である。それに対して、本稿では、反訓は転注と仮借の一形態、という視点を提示してみた。反訓は漢字造字法の法則にしたがって、出現するべくして出現したものであり、けっして特殊なことではない。正と反が互いに訓ずることができるというより、正反両義が相対しながら本源では一つだ、という点に、反訓の本来の姿を見るべきではないかと思われる。一方、反訓肯定議論のなかに、弁証法を力説する向きが多く見られるが、それは反訓の根ざす土壌にそぐわない。「相反相因」は相対しながらも相互肯定である点において、弁証法と似て非なるものであり、反訓は「相反相因」から考えた方がじっくりくるのではなからうか。反訓にまつわる諸説紛々のなか、やはり王念孫の一言が光っている。

思うに、反訓というテーマをめぐって、千数百年も議論が交わされてきたものである。葉鍵得の『古漢語字義反訓探微<sup>6)</sup>』が論点を整理するだけでも1冊の本になるくらい。同書が2003年に出版されたあとも、反訓関係の論著が後を絶たない。手元にあるのは同書の2005年版で、少なくとも2年のうちに2刷りしたか、再版したのであり、このテーマへの関心の高さをうかがわせる。

反訓はあたかも大きな磁場のように、古来より多くの人々を惹きつけてきた。その磁力の一つは「相反相因」だったかもしれない。

○本研究は、2019年度国内研究助成を受けたものである。

◎本稿の執筆に、香港中文大学の黄耀堃氏より、羅奇偉氏の論文『「反訓」性質研究』をはじめ資料のご提供、ご教示を受けた。記して感謝の意を表したい。

## 注

- 1) 王念孫『廣雅疏證』(張其昀點校本)上 卷第三下 中華書局 2019年 244頁
- 2) 『爾雅』卷上「釋詁第一」中華書局 2020年 17頁
- 3) 同2 29頁
- 4) 〔漢〕揚雄撰〔晉〕郭璞注『方言』 中華書局 2016年 24頁
- 5) 王寧『訓詁学原理』 中国国際広播出版社 1997年 116～117頁
- 6) 『白川静著作集1』所収 平凡社 1999年 367～368頁
- 7) 同4 375頁
- 8) 同4 369頁
- 9) 郭錫良『漢語史論集』 商務印書館 1997年 316頁 初出は『電大語文』1984年5月
- 10) 錢鍾書『管錘編』第一冊 中華書局 1979年 2頁
- 11) 『黄耀堃語言學論文集』 鳳凰出版社 2004年 330～335頁
- 12) 蔣紹愚『古漢語詞彙学綱要』 商務印書館 2005年 29頁
- 13) 同5 35頁
- 14) 同10 28～29頁
- 15) 同6 369～370頁
- 16) 郝懿行『爾雅義疏』上 中華書局 2017年 130頁
- 17) 羅奇偉『「反訓」性質研究』 2004年香港中文大學碩士論文 引用は香港中文大學圖書館「香港中文大學博碩士論文庫」より 75頁
- 18) 同12 140～141頁
- 19) 胡楚生『訓詁学大綱』 台湾學生書局 2016年 111頁
- 20) 同19 110～112頁
- 21) 何宗周『訓詁学導論』 香草山出版有限公司 1981年 142～143頁
- 22) 同5 119頁
- 23) 姚榮松「反訓界説及其類型之商榷」『國文學報』國立臺灣師範大學國文學系 第二十六期 254頁
- 24) 王引之『經義述聞』第二十六 上海古籍出版社 2018年 1559頁
- 25) 『章太炎全集 新方言 嶺外三州語 文始 小學答問 說文部首均語 新出三體石經攷』上海人民出版社 2014年 516頁
- 26) 万獻初「同源假借与詞義“反訓”」『咸寧師專學報』(哲学社会科学版) 1987年第一期 26～30頁
- 27) 齊佩瑛『訓詁学概論』 商務印書館 2017年 反訓に関する論述は、164～183頁にみられる。
- 28) 陸宗達『說文解字通論』 北京出版社 1981年 56～57頁
- 29) 章太炎「轉注假借説」『章太炎全集・国故論衡 先校本、校定本』 上海人民出版社 2017年 211頁
- 30) 同28 64頁
- 31) 同28 65～66頁
- 32) 同17 12頁  
引伸は一般に意義の派生を意味する。
- 33) 同6 382～383頁
- 34) 同6 387～389頁
- 35) 同6 369頁

- 36) 方以智『東西均注釋 外一種』 彪朴注釈 中  
華書局 2016年 133頁
- 37) 同36 135頁
- 38) 同36 136頁
- 39) 同36 142頁
- 40) 同38
- 41) 同36 139頁
- 42) 拙文「易経にみる回文的思考」 同志社女子大  
学総合文化研究所紀要 第33巻 2016年7月
- 43) 廖名春『「周易」経傳与易学史新論 修訂版』  
中国人民大学出版社 2014年 323～324頁
- 44) 馬如森『殷墟甲骨文実用字典』 上海大学出版  
社 2008年 193頁
- 45) 同36 233頁
- 46) 葉鍵得『古漢語字義反訓探微』 台湾学生書局  
2005年